



神は細部
に宿りす
ぎる

川崎ゆき

「些細事を語るよういなれば、終わりですなあ」

「些細なことですか」

「取るに足らぬ日常の、その人にしか分からないような話ね。そして、聞いている側は少しも面白くないし、興味もない。だから普通は語らないものだよ。語りというのは一種の芸でね、芸人じゃないが、受けるように話さないとだめなんだ。そうでないと聞いてくれないからね。だから、小さな話でも大きく見えるように話す。針を棒のように言う。しかし、それも面倒になり、もういいかと思うようになる」

「神は小さなところに宿ると言いますが」

「じゃ、神だらけだ。八百万どころじゃない」

「真理は細部にあるとも」

「じゃ、世の中、真理だらけじゃないか。まるで天地真理」

「そうですねえ」

「小さな話をするのは、大きな話とは関係がなくなってきたからだろうねえ。どんどん縮小し、箸の上げ下げに至る。次は箸の長さや太さや色だね」

「はい」

「君はご飯を食べるね」

「食べます」

「家で食べるかい」

「たまに自分で作って食べます」

「茶碗で」

「そうです」

「その茶碗の絵柄を覚えているかね」

「え」

「茶碗の色とか絵とか模様だよ。真っ白じゃないだろ」

「あ、はい」

「その茶碗、どうした」

「買ったと思います」

「自分で？」

「そうです」

「そのとき選んだはずだ」

「はい、少し大きい目のを買いました。丼茶碗よりも小さいのですが、普通の茶碗よりは大きい目です。一膳じゃ足りないし、二膳では多いので、一膳半ほど入ると思います。お代わりはしま

せん」

「めし屋で言えば、めしの小か中だね」

「牛丼屋の並よりもかなり小さいです。だからミニ牛丼程度です」

「色は」

「さあ、青っぽかったです。紺色だったと」

「覚えているじゃないか」

「最近朝は自分で作りますので、毎朝見えていますから、赤じゃないことは確かです。濃い青だと思えますが」

「色目の割合は」

「え」

「白地と青味の割合だよ」

「さあ、白の面積の方が広がったと思います」

「中は」

「同じ模様のようなものです」

「中も外も同じ模様かい」

「そうだと思います」

「何の」

「え」

「だから、どんな模様」

「そこまでは覚えていませんが、ツタのような感じだと思います、草のような」

「じっくり見たことは」

「ありません」

「しかし、茶碗を使ったり洗ったり片付けたりするだろ」

「洗っているときはご飯粒や汚れを見えています」

「そうか」

「食べているときは茶碗ではなく、ご飯の残りを見えています。ご飯を見えています。でも、ちらっとですよ。見なくても食欲がないときは、まだこんなに茶碗に残っているのかと見えています、茶碗は見えていません」

「箸もそうかね」

「割り箸なので、特に注意して見ていません」

「そうだろうねえ、見る用事がないからねえ」

「はい」

「ところが他に用事がなくなると、そう言うところにまで降りてくる」

「茶碗の細部にですか」

「細かいところへ降りてくる」

「じゃ、神様みたいですねえ」

「細部に宿るとか、降りるとかだね」

「そうです」

「これを作った人がいる。こんなのいちいち画いた絵じゃないだろうけど、その背景に大きなシステムがある。私はこういうものに絵付けする趣味はないし、焼き物の趣味もない。しかし、それらを作っている人や工房や工場のようなものがあるだろう。ただの茶碗だが、より大きなものと繋がっている。これはこれで産業だろう」

「はい」

「しかし、茶碗は茶碗だ」

「そうですね」

「箸もそうだが、亡くなった人の箸は捨てる。誰も使わない。連れ合いも子供、孫も」

「はい」

「茶碗もそうだ。個人の穢れのようなものが染みついているんだらうねえ。親の形見の腕時計は使うがね」

「口にすることはそうですねえ」

「着物や洋服はいい。まあ、着ないだろうが」

「はい」

「だから、そういうのは神ではなく、個人が宿るんだ」

「非常に参考になりました」

「そうか、小さな話を、受けるように話すのは大変だよ」

「はい、受け取る方も大変です」

了